



【展示資料の紹介】

櫓時計：やぐらどけい（和時計）

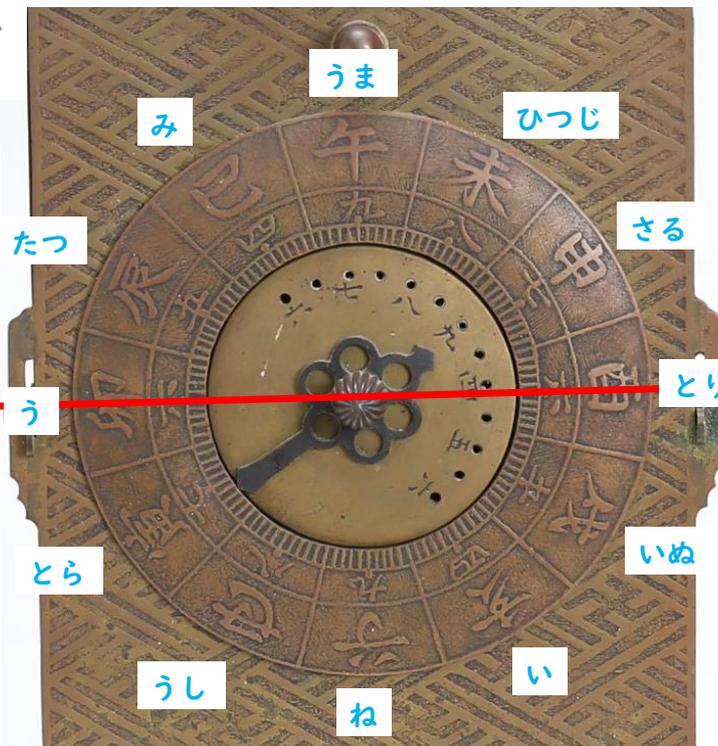
郷土資料館のシンボルマークにしている時計です。いくつか種類のあるオリジナル缶バッチの中でも人気のあるバッチのひとつです。時代劇などで見かける江戸時代の時計で、本来は時計の下にスカートのような形をした「櫓：やぐら」という台が付き、当時は限られた人（武家・大商人・寺社）しか持っていなかったかなり貴重なものだといえます。

日本に機械式の時計が伝えられたのは鉄砲伝来のころですが、日本の生活に合わせた「和時計」に変化していきます。西洋の時計と大きな違いは、一刻の長さが夜と昼、季節によって違うということです（不定時法）。つまり、昼を6つに、夜を6つに分けて、その一つ分を一刻（今の約2時間）とするので、日の長い夏の昼の一刻は長く、日の短い冬の昼の一刻は短いこととなります。和時計には複雑な仕組みが必要です。

和時計の文字盤は12に区切られていて、十二支の動物が入ります。文字盤の数字はお寺が鳴らす「時の鐘」の数で、一から三はありません。時を示す針は一本です。

↑ 昼
明け六つ
(日の出)

* 九～四の数字は、お寺が鳴らす「時の鐘」の数で、一～三はありません。「むつどき」=「卯の刻」「酉の刻」などいいました。



* 昼と夜をそれぞれ6つに分け、ひとつ分を「一刻」とします。

* 昼の一刻と夜の一刻の長さは違い、季節によっても変わります。

* 昼すぎのお腹がすいた「八刻：やつどき」に食べるのを「おやつ」といいました。

↓ 暮れ六つ
(日没)

夜

* 夏の企画展「発見、いなべの歴史」にお越しいただきありがとうございました。今後もいろいろなテーマをもとに企画展を行っていきます。1月からの新春の企画展に向けての準備を進めています。ご期待ください。

